

2024年8月4日（聖霊降臨後第11主日、特定13、B年）

牧師メッセージ

「朽ちる食べ物と永遠の命に至る食べ物」

（ヨハネによる福音書6：24-35）

司祭ヨセフ太田信三

先週の福音の最後、弟子たちは「心が鈍くなって」しまい、荒れる湖上でイエスへの信頼を失い、イエスを幽霊だと見誤りました。わたしたちが、「心が鈍く」なるのはどういう時でしょうか。わたしたち一人ひとりが自分自身のことを良く観察し、経験の中で、その「傾向」を知ることとはとても大切です。なぜなら、「心が鈍くなっている」時、わたしたちは無防備になり、不安や恐怖、人間的な思いに襲われ、支配されてしまうからです。それが先々週の福音で、「飼い主のいない羊」とイエスが表現した状態です。しかし、イエスはわたしたちがそのような状態にあっても助けに来てくださることもまた、先々週の福音で語られたことです。イエスが来てくださるのだから、わたしたちにはイエスの言葉を、救いを受けて、それに応えて生きていこうとすることが求められています。そのためにも、わたしたち自身がどのような時に「心が鈍くなっている」状態になるのか、自らの傾向を知っておくことが信仰の歩みにおいてはとても大切だということです。

今日の旧約聖書、福音書に共通する「食べ物」こそ、わたしたちの心を鈍くするものであることを、今日のみ言葉は伝えています。五千人にパンを与えたイエスは、カファルナウムへ移動しました。パンを食べた群衆は、イエスを追ってきました。群衆は五千人の供食を通して、腹は満たされたはずですが、しかし、それでもなおイエスを追ってくるのはなぜでしょうか。それは、ふたたび空腹に陥るのが怖いからであり、絶えず食物が得られる保証を得たいからです。そして、イエスを単なるパン製造機として求めているのです。そういう人間の姿を群衆の内に見出したイエスは言いました。「はっきりしておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満足したからだ。」さらに、イエスはその群衆に向かって言います。

「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。」

群衆がイエスを捜したのは、奇跡を通して欲求が満たされたからであり、「しるしを見た」からではありませんでした。群衆は朽ちる食べ物、地上のパンに囚われていたために、イエスを通して示された「しるし」を見ることができませんでした。「しるし」とは、神の国がどのようなものかを示すものです。そのしるしは、五千人の供食を通して、そして数々の奇跡、なによりイエスそのものを通して示されました。群衆はその「しるし」を求めていたにもかかわらず、自分の思いや見方に囚われ、心が鈍くなっていたために、それが分からなかったのです。

「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じるものは決して渴くことがない。」というイエスの言葉を忘れずにいたいと願います。